

# 「負の記憶」をどのように展示するか

—ベルリンのメモリアル・ミュージアムにみる想起の空間としてのオープン・スペースの現代的意義—

The Ways to exhibit "Traumatic Memories"

—The Significance of Open Space in the Modern Society as a Space of Remembrance of the Berlin's Memorial Museums—

山下 書子  
YAMASHITA Shoko

## 1. 序論

### (1) 研究背景と目的

戦争や災害など人類の負の記憶を伝える展示施設の重要性が世界的に高まっており、特に 2000 年代以降、メモリアル・ミュージアムというタイプのミュージアムが増加している。メモリアル・ミュージアムとは、過去のトラウマについて記憶し、教育することを目的としたミュージアムである<sup>1</sup>。一般にメモリアルは犠牲者を追悼する目的で建てられるが、ホロコーストという加害の歴史を有するドイツでは、「加害者の場」にメモリアル・ミュージアムが建てられ、自国の加害の歴史を積極的に発信している。一方日本では、戦争に関する展示の場合、日本の加害については展示すること自体が難しいといえる。

また、ヨーロッパを中心とした近年の記憶に関する研究動向として、迫害や虐殺などの「加害者」の表象に着目したものが増加している。特にメモリアル・ミュージアムに関する研究では、展示における加害者側の視点による負の記憶の表象に着目したものがあがるが、加害・犠牲による表象の違いに関して論じられたものは管見の限り見当たらない。また、展示における加害の表象に関して日本における研究は不足しているといえる。そこで、本研究の目的は、負の記憶の展示において先駆的なドイツ・ベルリンの二つのメモリアル・ミュージアムを対象に、加害・犠牲の視点によるホロコーストの記憶の表象を比較することでその特徴を明らかにし、それぞれが来訪者にどのような想起を促す空間となっているのかを考察することである。

### (2) 研究方法

本研究では、想起の空間としてのメモリアル・ミュージアムの構成要素として土地、建物、記念碑、展示に着目し比較する。文献調査と現地調査を行い、現地調査では主に展示資料の撮影から写真によるデータ収集を中心に行った。展示内容の分析では、アルヴァックスの集合的記憶論とミュージアムに関する先行研究から分析項目を「対象・時間・空間・個人的記憶」の 4 つに設定し、展示物に使用されている媒体と展示解説文の内容を項目に従って分類し量的・質的に特徴を把握した。

## 2. 各施設の概要と歴史的背景

### (1) テロのトポグラフィの概要と歴史的背景

現在、テロのトポグラフィ（2010 年開館）が建つ場所は、1933 年から第二次世界大戦中にナチスの中枢機関が置かれており、戦後は西ドイツの周縁地となり忘却されていた。1970 年代後半以降に市民団体などの活動によりその価値が再発見され、1987 年の「テロのトポグラフィ」展成功を契機にドキュメンテーションセンターとしての構想が本格化した。第三回コンペでは、過去二回の失敗を踏まえ、建物・史跡整備の設計において、そこが「加害者の場」であることが強調され「芸術的」に対処することが否定された。そのため建物は史跡や土地の景観を阻害しない質素な概観であり、室内も開放的で、外部空間との接続が意識された構造となっている。

### (2) ホロコーストメモリアルの概要と歴史的背景

ホロコーストメモリアル（2005 年除幕）は、1988 年からその構想に関する議論が始まった。市民団体は当初、現在テロのトポグラフィが建つ旧ゲシュタポ跡地に建設を要求していたが、加害者の場所に犠牲者のための記念碑を建設することに対する抵抗などの批判が上がった。1989 年のベルリンの壁崩壊により広大な空き地が使用可能となり、記念碑建設はドイツの国家的プロジェクトとなった。ホロコーストメモリアルは二度の建築コンペを経て、建築家ピーター・アイゼンマンの記念碑建設が実現したもの、記念碑にインフォメーションセンターを附設する案が可決されたことで、抽象的な芸術に「説明」が付けられることになった。地上のアイゼンマンの記念碑は約 2700 本の巨大な石柱群である。地下のインフォメーションセンターは、地上の記念碑の景観を損なわないよう地下に造られることになり、展示コンセプトの策定では、犠牲者個人に焦点を当てること、4 つのテーマ別スペースを設置することなどが決められた。

## 3. 各施設の展示分析

### (1) テロのトポグラフィの展示構成と内容

テロのトポグラフィは、3 つの常設展示から構成され、時系列に沿った展示構成である。多様な加害者が主に写真により可視化され、公的な文書資料

も多用される。犠牲者は多数・匿名的に表現される傾向にある。展示において言及される時期はホロコースト期に集中しているが、ホロコースト以前と第二次世界大戦終結後は同程度言及されていた。また空間の項目は、ヨーロッパよりもドイツやベルリン、施設の場所に関する記述が多い。テロのトポグラフィでは個人的記憶の展示はなかった。

## (2) ホロコーストメモリアル展示構成と内容

ホロコーストメモリアルは、時系列に沿った展示ではなく、テーマ別に部屋が分けられている。また、想起の対象は犠牲者が圧倒的に多い。展示媒体は写真が最多であり、当時の社会的状況や背景的な情報を提供する文書資料は少ない。一方で個人的記憶の表象として私的文書が展示に用いられていた。動画や音声などの視聴覚的な媒体が展示に組み込まれ、それらは情報を伝える展示物としてだけでなく、空間の演出にも寄与している。空間の項目は、ドイツよりもヨーロッパが圧倒的に多い。また、時間はホロコースト期とホロコースト以前に集中しており、第二次世界大戦終結以降に関する記述は少ない。



図 両施設における展示内部の様子

## 4. 考察

テロのトポグラフィでは、土地のもつ記憶と強く結びついた展示内容および建物のデザインになっているといえる。2章で述べたように、テロのトポグラフィは、その土地が加害者の場所であり、さらに、第二次世界大戦終結後は、西ベルリンの周縁の土地として忘れ去られていたというユニークな歴史を有する。そのため、その土地をそのまま見せることが構想の段階で決められた。そうした土地の記憶をみせるため、展示内容においてもベルリンや施設の場所という空間的枠組みでの語りが多くなっていると考えられる。また、展示内容で言及される時

代は、ホロコースト期に集中しながらも、それ以前と以降が時系列的に示されることで、時間的な連続性が意識されている。テロのトポグラフィでは、このように土地の記憶と時間的連続性を重視した展示や建物の空間デザインによって、客観的な事実としてホロコーストを提示することで、来訪者による学びや考察を促す想起の空間となっていると言える。

一方で、ホロコーストメモリアルでは、記念碑と展示内容の関連が強くなっていると考えられる。これは構想段階において、インフォメーションセンターの展示が、記念碑を補完する説明として位置付けられていることから伺える。ホロコーストメモリアルは、ヨーロッパという広い範囲における膨大な犠牲者をドイツの首都の中心部において追悼するという、一極集中的な性質を持っているといえる。そうした性質上、土地そのものと展示内容は結びついておらず、また、時間的連続性も展示においては重視されていないと考えられる。そのため、ホロコーストメモリアルでは、媒体として地図などを活用し、個人の記憶をヨーロッパのそれぞれの場所と結びつけて展示することで、出来事の実在性や具体性を持たせていると考えられる。また、個人の記憶に焦点を置くことで、客観的事実よりも、犠牲者個人個人への共感が促される想起の空間になっているといえる。

ホロコーストをはじめとする負の記憶の継承では、それが起きた背景を考えることも重要であるが、犠牲者個人の記憶を想起し、共感的な想起を促すことも必要である。

最後に、両者の共通点として、都市の中心部に所在し、誰もが無料で利用できるというアクセスのしやすさがある。そのため国内外から多くの観光客が訪れることから、想起を担う主体は多様であり、多くの人々に開かれた想起の空間であるという特徴も有する。オープン・スペースとしての想起の空間は、今後日本においても検討する意義があると思われる。

1) Sodaro, A. (2013): Memory, History, and Nostalgia in Berlin's Jewish Museum. *International Journal of Politics, Culture, and Society*, 26 (1):77-91.

**Abstract:** Research on the representation of perpetrators' memories has increased in recent years. In Japan, however, such studies are still scarce. This study compared the way traumatic memories are exhibited in two memorial museums located in Berlin, Germany. At the Topography of Terror, the memorial of the perpetrators, the exhibition focused on the memory of the site. On the other hand, the Holocaust Memorial, the memorial of the victims, evokes a sense of empathy by focusing on the memories of the individual victims. The two memorial museums locate in the center of the city, and their exhibitions complement each other. The Memorial Museum as an open space for diverse visitors would be worth considering in Japan.